

近年の医療系教育においては、実践能力を高めるために、OSCE（客観的臨床能力試験）、PBL（問題基盤型学習）、e-learning など学内教育における様々な工夫がなされている。他方、実践能力を高めるための中核となる臨床実習では、その効果が大きいことに異論はないものの、1960年代に行われた形態を踏襲している方法論については、学生や臨床実習指導者・受け入れ施設のみならず養成校の立場からも多くの課題が指摘されている。

そこで本特集では、臨床実習の現状と課題を踏まえつつ、学生、臨床実習指導者、養成校、受け入れ施設にとって有意義かつストレスの少ない臨床実習の具体的な展開について検証することとした。

■病院・施設からみた臨床実習一位置づけと受け入れ（渡辺京子論文）

養成校や学生数の増加、医療環境の変化により、現行の学内臨床実習制度は学校側にも施設側にも厳しい状況になり、従来の指導法では対応が困難となってきている。

本稿では、実習施設の特徴を活かした施設主導型の指導法を紹介する。ISO9001；2000（国際標準化機構）のPDCA サイクルのプロセスを活かしたクリニカルクラークシップ導入と、アンケートによる学生満足度調査、あわせて将来的な展望として TTSP（卒後新人研修制度）についても言及する。

■臨床実習における教員と指導者の役割と連携（大橋ゆかり論文）

筆者らは学内実習で患者シナリオを用いたシミュレーション実習を取り入れているが、患者役の学生は理学療法士役の学生の加える操作に対応して障害を変化させることができない。これが学内授業の限界であり、だからこそ臨床実習では「学生と患者様の相互的な反応」を体験する時間を多く与えていただきたい。症例報告書などのレポートは、実習終了後に学校教員が指導して完成させればよい。

■臨床実習におけるメンタルヘルスケアシステムとしての整備を考える（椎原康史、他論文）

近年、整備が進んでいる職場のメンタルヘルスケアの考え方に準じて、理学・作業療法の臨床実習での問題点を整理し、学生の安全・健康への管理責任を tutor 制度を利用して明確にすること、学生・教員双方へのメンタルヘルス研修、学生のプライバシー保護に配慮した対応と緊急の事態が生じた際のリスクマネジメントを区別した運用など、学生のメンタルヘルスケアをシステムとして整備する提案を行った。

■座談会 臨床実習を変えられるか？ その具体的展望は

臨床実習に関する過去 10 年の展望と現状の比較、現在の臨床実習で変えなければいけない本質的課題、理学療法教育における臨床実習の到達目標などについて整理し、教育課程の目的と現状に見合う臨床実習の具体的展望について模索、提言する。